

HS ニュースレター

秋季号・東京駅ルネッサンス

東京駅の「復原」事業：誰が費用を負担？
天草の最新ニュース2題：「衰退か活性化か」
ハートストック定例会報告・海外出張報告

東京駅の「復原」事業：誰が費用を負担？

問もなく誕生から100年になる東京駅が、3年半の工事期間を経て、再びその姿を見せた。後世の修理で改造された部分も原型に戻すという意味での「復原」が成った東京駅は、建設時の3階建ての赤レンガ姿で、ホテル、ギャラリー、ドームなど往時の栄華を実感させる。

しかしそれだけではなく、地下の新設と、免震構造の組み込みといった見えない部分での工夫も注目に値する。まさに100周年の事業にふさわしい内容と結果である。

もちろんこれだけの事業には、それなりの費用がかかる。実際に総事業費は、約500億円という膨大なもの。この費用をJR東日本はどうやって調達したのだろうか。民営化されたJRにこれほどの資金はなく、借りることもできないであろう。また借金まみれの政府が補助金を出せるはずもない。それでは大金持ちの篤志家がいたのであろうか。

その答えは、いわゆる「空中権の売買」によってである。つまり、都市計画上の仕組みである「特例容積率適用区域制度」の適用で、3階建てである東京駅で使い切れない許容容積率を、駅周辺で規定容積率を超えて高いビルを建てたい業者（例えば新丸ビルを建てた三菱地所）に売ることで費用を調達したのである。

それでは、なぜそれだけの高いカネを出して、三菱地所や不動産ファンドが容積率を買ってまで高いビルを建てるのだろうか。それはもちろん、それだけ払ってもおつりがくるほど高いレントが取れることを見込むからである。しかしそんな高いレントを誰が払うのだろうか。それはそれだけ高いレントを払っても、東京駅周辺に立地することで（するからこそ）もうかる企業活動があるからである。そしてそのような企業が提供するサービスにはそれなりの価値があるからあろう。

つまり、結局誰にとっても費用以上の便益があるので、経済の仕組みがよければこれだけの事業が可能になるといえる一宮尾



上：東京ステーションホテル
中：修復された南口ドーム
下：ドーム内の天井の様子

ハートストック研究会とは

「ハートストック研究会」は、モノのストックだけでなくハート(心)のストックを豊かにするにはどうしたらいいかを追求する人たちの集まりで、誰でも入会できます。東京や地方さらには世界各国の生活や仕事の問題を、土地や住宅といったモノのストックのあり方から、人の考え方や気持ちといったハートのストックのあり方まで議論して自らの心を豊かにすることを目的としています。

天草の最新ニュース2題：「衰退か活性化か」

ハートストックの原点である天草は最近どうなっているのかを見るために、グーグルで天草関連のニュースを検索してみた。その結果、以下の2つの対照的な動きがあることが分かった。第一は、閉校のニュース。「透き通る声の子守唄・閉校前に福連木小」(<http://kumanichi.com/news/local/main/20121112001.shtml>)これは少子高齢化が進む日本全体の傾向であるが、特に天草のような「衰退」地域で著しい。

しかし、衰退一方かというそうはいえない。第二のニュースは、地域独自のブランドの強化、売り込みである。「新たに2品、天草ブランド、小ダイ押しずし、天草大王唐揚げ」(www.nishinippon.co.jp/nnp/item/333836)天草では、本渡商工会議所などでつくる「天草謹製・認定委員会」により、天草の独自ブランド品が認定され、専用のロゴマークを張って販売されるというもの。こういった地元の努力が、地域の活性化につながることを期待したい。

ハートストック定例会報告



10月定例会
スピーカー
坪井章次氏

10月定例会・坪井章次氏『古代日本正史』について」

講師：坪井章次氏(サンヨーホーム参与)：

HS研究会10月定例会が10月9日に開かれ、講師は元茨城県庁職員の坪井章次さん(小出会員のご紹介)、テーマは「古代日本正史」でした。

坪井さんは、原田常治著『古代日本正史』(1976年、同志社)に基づいて、独自の仮説を提示。多くの資料を配布され、卑弥呼は天照大神であり、神武天皇が卑弥呼の孫であったこと、その初代天皇即位の年が西暦241年といった説を詳しく説明されました。

最後に、余談として「お酒について」触れられ、二次会用にお持ちいただいた大吟醸の「茨苑」と「吟奏」についての説明がありました。

主に時事問題を取り上げてきたこれまでの研究会とは「一味」違った内容の楽しい会合でした。(宮尾)

6月定例会報告：「医師からみた東日本大震災と放射線」

講師：加藤直哉氏(健康増進クリニック副院長・医師)：

6月12日 ハートストック研究会6月定例会がありました。

講師に医師の加藤直哉さんをお招きして「医師からみた東日本大震災と放射線」というテーマでお話いただきました。加藤さんは東日本大震災による福島第一原発事故以来、人体と放射線の関係について正しい知識の普及に努められてきた方です。

放射線については、非常にナーバスな問題のようです。それは専門家である科学者でさえ両極端な見解があり、一致した基準が見いだせていないことも大きな理由で、1か月100mSv(ミリシーベルト)まで大丈夫という科学者もいれば、放射線に安全のレベルはないという科学者もいます。これでは人々が混乱するのも当然といえそうです。

医学的に放射線が問題なのは、発がんや遺伝的影響

の二点に絞られるようですが、加藤さんは現在の福島県内の放射線量は人体に全く影響がないレベルであり、それよりも怖いのが風評被害や放射線恐怖による心理的影響並びに移住等によって引き起こされるストレスによる健康被害であると結論づけています。それは、動物実験や過去の原発事故や原爆の追跡調査で明らかになっています。さらに、放射線よりももっと怖いものが日常生活の中にあり、それは野菜不足、運動不足、肥満、過飲酒、タバコの五つと断じています。これらは放射線の発がんリスクに比較して格段に高いリスクがあるとデータは物語っていました。特に砂糖は免疫力を著しく低下させる実験データもあります。日頃から大いに留意したいものです。

放射線については難しい問題も沢山ありますが、やはり正しい知識をもって、正しい行動をすることが大事だと感じました。不確かな情報が風評被害を生み、それがストレスになり、病気になってしまうの方が問題だと思います。加藤さん、ありがとうございました。(飯窪)

海外出張報告：宮尾尊弘

今年も例年のように5月から7月末まで3か月ほど、ロサンゼルス南カリフォルニア大学で教えてきましたが、最近の社会経済のグローバル化とIT化によって、教育のあり方が劇的に変わってきていることを実感しました。

私の場合、まず授業の冒頭で、その日の授業のテーマに関係のある最新のニュースを扱ったYoutubeビデオなどを、ネットにつながった教室のスクリーンに映し出して、それについて学生たちに議論させて、徐々に議論をその日のテーマに近づけていくという方法をとっています。もちろん教科書はありません。現実の動きも、教える内容も、最新の動きは印刷物の中ではなく、ネット上でしか得られないからです。つまり、今は、何事も基礎と応用を同時に教えることが求められており、そうしなければ教育は役に立たず、また学生たちも興味を示さなくなっています。もちろん、それだけ教える側の努力と準備がこれまで以上に必要で、実に厳しい時代になったものです。

HS ニュースレター

年3回発行
ハートストック研究会
発行人・宮尾尊弘

住宅や土地といったモノのストックだけでなく、人の考え方や気持ちといったハート(心)のストックを豊かにするための研究会のブログ：
<http://hstock.blog90.fc2.com/>

ハートストック研究会
2012年度事務局
幹事：飯窪光隆
会計：田淵千代子
顧問：二木憲一